

折合～成川
往還道物語

四万十町 割合は昭和25年に室町町に
編入されるまでは、大正町で、あたため
昔から広大な国有林の中を通るこの
往還道により深い交流が行なわれ
ていた。

車社会になってまだ100年にもならないが、
この往還道はほとんど人が通ることもなく
静かに歴史の中に埋もれつつある。

かつて人里を結び、人や
物品、情報、文化が
行き来した大切な生活の道
は、遺道。

やわらかく、黒い土の下には
この道を往来した人々の
足跡が刻まれている。

おひげ様哀話

「折合側」の尻根のほかに大きな根上が「しん」の元に「おひそ様」の洞がひっそりと記されている。

中津川から寺野の八百廿生入奉公にきていた美人で貞立てのよい働き者の「おひそ」という娘。主人にいく言寄られこぼみおしおせし娘させられた。主人の妻にも知られ師匠の寒い夕暮時、川に家出て中津川に向かった。日も暮れて各地で宿を断れられまっ暗な山坂の道を身重の体で泣く泣く越えていく。境にお寺で産気づいて大で産んで逾方にくれむると山が崩れられ老樹の上に子均てはひ上がった。腰の鏡を山犬に向けて山犬はみるんだが根元に落とすと鏡は裏返しとなりこの地で山犬のえじきとなってしまうといは悲惨な物語がある。示司には鏡が祀られておりいっしんが安産の神様として人々が信仰するようになす。

成川橋より往還登山口

提灯のあかりで

足中(あしなか)
つま先部分のないわらじ
夜なび行事にわらじと櫓の
組で打って作っている。
月夜まですく
はまですく。

山道を歩いている時に
もっとも気を付けねば
ならないことほ…
『思いこみをしたまま
歩かない』ということである
(ナゲル)

城戸木森
908m
一等三角点
眺望はない

人里を結ぶ往還道は、年に
2〜3回、各家から夫役で
刈りあげや手入れ、修繕をして
大切に維持していた。
馬も通れる道幅だった。

馬は小型で粗食にも耐える力も強い土佐馬と思われる。

昭和3年に管杯署が木材生産事業に着手
木材搬出の森林鉄道が川口の豊林場
まで敷設される。
たくさんの方が山仕事に従事していた
とぎれいであった。

かって日本一!!

神が火ヒノキを守る
ように周囲をかこ
んで生えている。

11月26台風で主幹が折れてしまったか
その存在感は圧倒的
樹令850年

風が樹々の間を
口笛と吹きなが
らわたっているようだ。
木もれ日もやさしい。

大工の
人工林
業林

戦時中、検油と燃料に
採るために、ヒノキを炭こ
あぶった黒く炙けた
株が79数歩道沿いに
残っている。
宮内にあった祓行場で使用
していたとも言われている。

山畑火十回
寺をとり
作てい

かきまわし
も海
よりこの
まはれた

茶わかし駄場
藩政時代 行政管理や
お留守の見回り役人の
送り迎への引き継ぎ場。
折合の地下役達が案内し
てくる役人を中津川の山番や
地下役人が羽織袴で
出向え、草鞋や弁当を
用意し、お茶をわかし待ち受け
ていた。
折合に越す時とは同様に
折合の山番達が出迎えた。
津川 徳玄誠男
正・中津川 おかしみちくくりより

明か311間伐林

折合は昭和26年に望川町に編入
されるまで、藩政時代より折祖村
として大正町(上山郡)であった。
この大遷が折合・中津川を深く
結びつけた、人物・情報など
何百年もの間、交流がけられていた

中津川本村で神祭がゐると
奥神の商人が塩鱈を
売りにこの山道を越えていた

長者ヶ奈路

明治のはじめ、津野山郷より山伏のような人が入作(いりさく)(開墾)に入りこのあたりを開拓。神社も建立あるほど人も多く生活していた。

月山の神

河内神社

宮村署があると同
たぐの山に入
軌道から車道に
バスが興の事業所
青木さんとのバス
満員の人でいつも
ちょっと話めあった。

あたりまえだったけれど、
集会所のところに船と初期
セロさんという身よりのない人が
「タリヤ」というゲタやメジバ
ハノキなどをつくる草履屋の
店があった。
年をとって弱ったが、部落の人が
昼も夜も交代で身のまわり
世話をしていた。
奥にも市川サツ子さんという人
世話をしていらした。
当時は一人ひとりが部落の
みんなが家族のように大切に
していた。


 桧生原駄賃組合
 (大正五年)
 こまで折合



稔生原

昭和3年に営林署が
入るまで車道はなく
全て往還道だった

折合の青木義典さん、政子さんご夫妻に
たくさんのお話をお伝えし
いたたまへる感謝しています。2015.3.9

小味野川口線